
ドブネズミ文学

オオハタ ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドブネズミ文学

【Nコード】

N1316H

【作者名】

オオハタ ユウキ

【あらすじ】

最近の音楽はカスばかりだという自論を持つ主人公が、いろいろやります。

最近の青春パンクはカスばかりだな、と、小さなライブハウスの中で、とあるインディーズのバンドの演奏を入口近くから眺めながら呟いた僕は、右手に持っているカクテルを飲み干した。何かが違う、何かが。今から20年も前に結成された伝説のバンドのほうが、今のより数倍いい。時代は新しくなっていくのに、音楽は劣化していくのか。なんて偉そうに批評していたら、横でノッていた兄ちゃんの肘が鼻に直撃した。「うばっ」というマヌケな声を出し、うずくまった僕には目もくれず、くだらない音楽にノリ続けている僕は鼻から滴り落ちる血を手で拭いながら、ライブハウスをあとにした。

外に出る。煙草の伏流煙で汚れた肺に、空気を流し込んだ。ポケットに入れてあるiPodの電源を入れ、イヤホンを入れた。心地良いリズムと共に、ブルーハーツの曲が流れた。やはりいいあんなエセ青春パンクなんかめじゃないや。電車に乗り、家に着いた僕は、ベッドの下にしまっているギターを取り出した。まだ夜の8時か。い指で、げんをおさえる。イヤホンから流れるリズムに合わせながら、覚束ない手でギターを弾く。何度も何度も繰り返し、頭の中でイメージする。僕はライブハウスの檀上に立ち、ギターを弾く。そして斜め前には、裸になったヒロトが歌いながら暴れている。梶君と河ちゃんらは後ろで僕たちを引き立てている。マーシーは僕と同じリズムを弾いているんだ。そんな妄想は、母の「晩御飯よ」の声で無残にも消し飛ばされた。時計の針は12時を越えていた。飯を食べ、また自分の部屋に戻った。明日は学校。行きたくない。古いバンドが好きだけなのに……。今流行りの下らない洋楽のパクリエセR&Amp;B、アングラでオナニーを続けるジャパニーズヒップホップ。何がいいのかわからない。そういうのを聞くやつが、僕の趣味を否定していいわけがない……。くそ！ 行きたくな

い。でも学校に行かないと母に何言われるかわからない。僕は考えるのをやめ、無理矢理眠りについた。

朝、目が覚めると同時に、重いため息が漏れた。しばらくベッドから起き上がらず、天井を眺める。「世の中に結果なんてねえんだからよ」ライブDVDのヒロトの台詞が頭に浮かんでは消えていった。

——俺には夢がある 両手じゃ抱え切れない

——本物の夢を見るんだ 本物の夢を見るんだ

僕は、重い体をゆっくりと起こした。制服に着替え、鞆とiPodと貯めておいた二万円を手に取り、部屋を出た。歯を適当に磨き、「行ってきました」「あ、お兄ちゃん、ちょっとコンボ貸してね」という妹に適当に返事をし、玄関をあとにした。

バス停には同じ恰好をした学生でこった返していた。うだうだと話をしながらゆっくりと乗り込むバカたちを押しながら、席に着いた。隣の女は、EXILEがどうだ、幸田がどうだ、と話している。その話題を掻き消すようにイヤホンを耳に入れる。皆殺しのメロディ。狼になりたいなあ。狼になればあいつらを……。はあ。

学校に行きたくないという僕の思いを無視するがのように、バスは学校で止まった。バスから降り、教室を見上げる。突然、背中に衝撃が走った。

「ボーっとするなよクソ」

デブで不細工なくせにイケメンとつるんでいるというだけで女と付き合っているF山が、僕の背中に鞆を当てて来た。F山は、それを無視し階段を上る僕に、執拗にちよっかいをかけてくる。

「無視するなよ。あ？ 教室に入れば楽しい時間が待ってたぞ」

僕は無言のままでiPodの音量を上げた。

教室では、セックスしか頭がないバカみたいな男たちが、ミスチルの話題で盛り上がっている。僕は、自分の机が無いことに気付いた。そして、頭に衝撃が走る。クソみたいな音楽を口ずさみながら、T中が僕の髪の毛を掴んだ。

「なあ、B・Zって最高にロックだよなあ？」

「T中君、そいつ懐メロしかかかないんだってw」

「あ、ぶるうはあつ、かwわりいわりい。播州のー夕暮れにー、だろ？」

「ちょwそれがガガw」

ひとしきり喋った二人は、僕に飽きたのか、自分の席に戻っていた。僕はiPodから流れる音に身を任せた。何がミスチルだ、何がB・Zだ……。クソ！

自分の机をベランダから運び、席に着いた。紙を丸めたクズやケシカスが、頭や体に飛んでくる。それを見てみぬフリをし、止めようとしないうちに教師。僕は俯いたまま、ただその時が過ぎるのをひたすら待った。それからも二人のイジメは止まることなく、ようやく放課後になり開放された僕は、二万円をにぎりしめ、学校の近くにある楽器屋に急いだ。本当はマーシーと同じギターが欲しいんだけど、僕に買えるのは二万円レベルが限度だ。僕はギターを両手に抱え、バス停に戻った。

「あら、何もってるんだ？」

わざと時間帶をずらしたのにもかかわらず、僕を待っていたかのように、二人はバス停に立っていた。

「急いで帰るから何があるんだと思いきや、ギターとはねえ」

二人はニヤニヤとしながら僕に近づいてくる。僕は踵を返し、また楽器屋の方向へ走った。デブのF山は何とか逃げられる。しかし問題はT中。こっちはギターを持っている。明らかに不利。クソ！

——どこかで誰かが走ってる 汗がたくさんでた
なんて替え歌を歌っていると、髪の毛を掴まれ、無理矢理足を止められた。

「懐メロ野郎がエレキかよ。アコでいいだろ。俺が預かるからな」
僕は何も抵抗できず、T中にギターを奪われた。そこから動くことができなかった。涙が出た。

——F山とT中のような　ロクデナシのために　この星はぐるぐるとまわる

僕は朝以上に重い足どりで家に帰った。そして、気分転換にブル―ハーツをいれっぱなしにしてあるコンポの再生ボタンを押した。

——このごろ流行りの女の子　お尻の小さな女の子

僕の怒りは遂に頂点に達した。けたたましい爆発音がしたと同時に、家が一気に爆発した。そういえば、妹がコンポを……。

終幕

（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1316h/>

ドブネズミ文学

2010年10月8日14時30分発行